



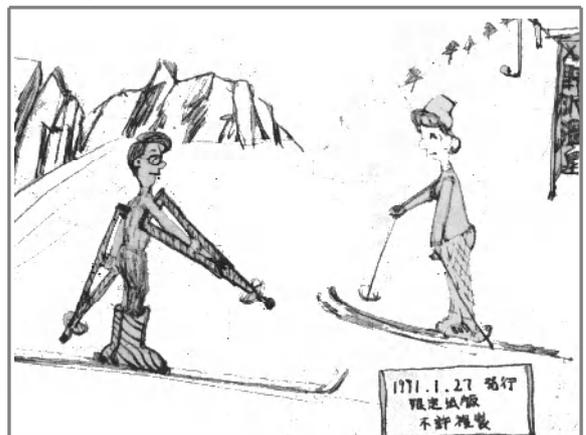
チリも積もれば山となる。このOB野沢温泉スキー合宿も20年となったというから驚きであり、それだけ我々も年をとったということになる。

KUWVOB会というのは昔から存在していたが、ご存知の通り15期の人たちが今の形にしてくれたといっても過言ではない。野沢温泉OBスキー合宿も当初は彼らが企画したものである。スキーまで15期の厄介になるのは申しわけないということで、小回りの利く⑩森川幹事長、⑪青柳幹事長代理の組み合わせで肩代わりし、以降人員の出入りがあったが、今日に至っている。その中で一貫して青柳さんが継続して世話をしてくれた功績は大きい。(⑩は11期の意味)

私もOBスキーには何回か参加した。当初大阪始発の北陸線周りの夜行、シュプール号があった。これは安くて便利だったが、国鉄分割のあおりを受けてだったか、なくなった。実は、神戸からだとなれば野沢は遠い。昼過ぎに出発、新幹線を利用して晩飯が終わった頃にやっと野沢到着。そんなんだから朝に出発しても、その日の滑降は殆ど無理。やはり野沢は遠い。それでも参加していたのはある理由があったからだ。

私の写真アルバムに1971年1月27日発行の小さな冊子がある。タイトルは「OB SKI 大会 (KUWVOB2/11~14)」だ。冊子の記載内容はこうだ。

- ・実施場所
長野県下高井郡野沢温泉
- ・宿 泊
「かしや」1泊2食で1,200円程度
- ・行動予定
昼は自由行動、お互いに親交を暖める。
下手な人を対象に⑫大出スキースクールあり、現役が教授する。
夜はミーティング、百人一首かるた大会、お話し、その他。
- ・集合方法
2/11に来る人については、適当に滑って午後5時までに民宿に来ること。
2/11以降に来る人については、民宿に直接来るか、ゲレンデで知っている人を見つけること。



結構いい加減な内容の冊子であるが、今のようにメールも携帯もなく、連絡もおぼつかない時代、これでも十分に成り立つような大らかな時代だった。

OB野沢温泉スキー企画をしたのもいい加減な理由だった。十年一昔とはよくいったもので、11期生は上級生と気質が違うと言われた。それに22名の一大勢力、部を4年で卒業したにもかかわらず、大学に籍を置いていた者がかなりいた。勉強が好きだったのかといえば、それはかなり怪しい。それでも部からは追い出される。当時の風潮としてはせめて4年以上は大学生然とすべきであり、山との距離を置かねばならない。ならばとて、ひねりだされたのがスキーだった。当初は同期の仲間だけだと思ったが、2年前に創部十周年記念行事を白山で実施した実績もあり、OBにも声を掛けようではないかということになった。しかし、当時は超スキーブーム、適当なスキー場所と民宿を捜すのが大変な時代、それを守内が見つけてきた。その場所が野沢温泉だった。OBへの連絡は加藤、会計は森川が担当するというので、さほど考えずにやろうということになった。

11期以上となるOB全員に事前案内した。86名から返信があり、そのうち30名（現役3名を含む）が参加可能性ありだった。返信があった人には冊子を送り、再度参加の可否葉書を2月3日までに投函するよう依頼した。

土曜休暇も完全に定着していない当時、3泊4日というのは、勤め人にとってはやりくりが大変だったと思う。それでも写真で確認すると参加者は次の通りである。

③田村、高島 ⑤大橋 ⑦木下、田丸 ⑧藤井信 ⑩吉田 ⑪青柳、矢崎、畔山、守内、片田、橋本、上村、杉森、小山、森川、加藤 ⑫大出、宮島、近藤



高島さんなどは、東京でスキー一式を買い求めスーツ姿で参加されたのには驚いた。東京への出張帰りに野沢に立ち寄ったのだ。

野沢は当時としては、大規模スキー場であるが、それでもリフト13基、テーパリフト1期、ロープ塔1基だけで、もちろんゴンドラはない。

山上まで行くのも一人掛けのリフトだ。現在と違い登行速度が遅いうえ、もちろん風除けカバーもない。普通のリフトと違うのは、長時間乗るのでスキーが落ちないように足置きなるもの（写真）が着いていた。雪が降ると、山上に着くまでに相当雪が積もったし、すっかり体が冷え切った。



テーパリフトというのは、上の平の緩斜面に設置してあったリフトだ。水上スキーの雪面版といった感じで、スキーを履いたままロープからぶら下がった円盤を股にはさめば、山上方向に引っ張ってくれるという装置である。せつかく雪面の上に引っ張ってくれるのだからパラレルの真似事もできる。あまり調子に乗りすぎ転んでしまう人がよくいた。この装置の途中に30°くらい向きを変えるところがあり、そこでも転倒している人がよくいた。転倒したら一卷の終り。そこでリフトとはおさばらだ。ロープ塔というのは、縄がグルグル回っているの、それを手でつかんで上に引っ張ってもらうという超初心者向きの緩斜面での装置である。

宿の「かしや」からは、客でいっぱいになったので近くの「やましん」という小さな民宿に変更して欲しいと言われた。民宿といっても、当時は普通の家を開放した程度だったので、家人はどこで寝ているのだろうか心配になるほどであった。居間には戦後20年以上も経っているのに大元帥姿の昭和天皇と皇后の写真が飾られていた。何とも不思議な空間であった。暖房は炬燵だけだったが、客は我々だけ、貸切状態だったので居心地は良かった。階段に置いてあるリンゴは食べ放題だったし、凍みた野沢菜がうまかった。これも

頼めばお茶菓子代わりにいくらでも出してくれた。難を言えば、副作用としてやたらと屁が出る。野沢温泉のリフトでは、よく体を傾ける光景を目にするのはこれだと合点している。屁に色があるならば、極楽の如く五色の雲がリフトに沿ってたなびく光景が見えるだろうにと思うほどである。



KUWVが練習場所として選んだゲレンデは湯ノ峰ゲレンデである。今では初級ゲレンデになっているが当時は中級ゲレンデだった。下の長坂ゲレンデから長々と登りリフトに乗ってやっと着ける場所である。リフトを使ってガンガン滑ることはしない。ワングルらしく階段登りで30mほど登り、ボーゲンかパラレルで2~3回廻るだけである。パラレルで回れる人は何回もそれを披露。私はそれを眺めるか、転ぶかのいずれかであった。また、ワングルらしくということで、ゲレンデから飛び出そうということになり、湯ノ峰ゲレンデの上部に行くことになった。



冊子には、「ツアーに行くかも知れないのでシールを忘れずに」と書いたはずなのに、持ってこない人がいて、四苦八苦していた。このときは、シールのありがたさを痛感したものだ。シールと言ってももちろん本物ではなく、ナイロン製の安

物だったが、あるとなしではこんなにも違うものかと思った。

また、当時の風潮として、スキー技術に応じた服装というのがあった。セータで滑るのは最上級、それからヤッケ着用だが、高級なスキー用、普通のスキー用、山用とランクが落ちていく。私なんかは山用の上から被るいかにも安物のヤッケであった。転倒しないと上達しないので、その点、完全防備の山用は、好都合であった。服装の費用も助かる。

そのような意味からも、私を恐がらせたのが⑦木下(現姓村田)さんだった。「加藤さん!!何で私と同じ靴を履いているのよ!!!」って。

当時の靴は革靴で紐式が主流だった。更に高級品となると、足がぐらつかないように中にもう一つ紐がある二重紐になっていた。ところが、私の足は甲高で幅広、かつ足首が太い。適当な靴を捜しても履けるものがなかった。困った店員が最後に勧めてくれた靴がピッタリだった。

それは見たこともないバックル式の皮靴だった。しかもメーカーがドロミテ、靴底はビブラム製



という。まるでウェーデルン級の靴だったのだ。この値段のせいで板まで手が回らず、スキー板は至って安物だった。板で許してもらえたというのはちょっと大袈裟であるが嘘ではない。

靴に関しては、着脱が便利なので、あつという間にバックル式の靴が主流となり、しかも、材質がプラスチックになった。

革靴は職人の手の香りがする。この記念すべき靴は、未だに私の部屋に捨てられずに残っている一品である。

さて、湯ノ峰ゲレンデから下山するのは、牛首コースが近い。このコースは滑降に失敗して首を折った人もいたという最難関コースということで有名である。ということで、湯ノ峰・上の平連絡通路を延々と歩き、上の平に出て、そこから下山とになった。

山上でもここは初心者コース、しかも、標高が高いだけに雪質が良い。ボーゲンでもスイスイと滑れた。途中で何かの標識があったが、通過する

くらい心地良く滑降できた。下るにつれて、だんだん斜度がきつくなり、当然コブが現れ、そのうち円柱のようなコブまで出てきた。

後から知ることになるが、それがコブと斜面で有名なシュナイダーコースだった。先輩も良く転んでいたが、私にとっては恐怖の絶壁だった。それでも対応できたのが階段下降だ。斜滑降、キックターンも初心者にとって随分と応用範囲が広いが、階段下降も有効な技である。横滑りの技を修得してからは、ほぼ使ったことのない技術であるが、野沢温泉に来る度に、階段下降のことを懐かしく思い出す。



翌日からの下山コースは、長いながい林道コースを選んだのは言うまでもない。

当時恐かった木下さんも、写真で見ると随分と可愛いらしい。参加した同期では橋本、守内の二人が故人となってしまった。二人ともスキーが上手かったのに。

翌1972年も野沢温泉OBスキー合宿が開催されたが資料は無い。室内の写真から判断できる参加者は次のとおりである。

③田村 ⑤高田 ⑦木下 ⑧柴田 ⑩寺本、白石、吉野 ⑪森川、矢崎、小山、南野、青柳 加藤 ⑫町田、大出、西田、津田、野村

記憶にあるのは、長坂からの登りリフトが羊腸の列であったことだ。待ちきれず同期の矢崎がスキーを担いで登っていった。私らは2時間リフト待ちだったが、山上に着いたとき彼が少し待ったと言っていた。帰りの飯山線の列車が蒸気機関車で、戸狩駅ではすでに超満員、連結機の上まで人が乗っていた。

その年が学生最後であったこと、2月連休は超満員だったことから、それ以降の野沢温泉OBスキー合宿は長い間途絶えた。

